１６　コンテナ育苗の留意点

（１）稚苗段階（屋内）

・春先、早期に種子を播く（「１年生コンテナ苗」を養成する場合）
・気温が低い間は、温室内やマルチ内で管理し、稚苗の初期成長を促す
・キャビティに入れる培地の高さを、最終的に上面よりやや下げる
・春先、気温及び地温の高い環境を作り、稚苗の発芽・初期成長を促す
・培地が乾いたら、散水する
・自動散水で補えない部分（散水がうまく届いていない箇所）は手散水を実施する
・稚苗の食害を防ぐため、薬剤散布を定期的に行う
・病害（赤枯病等）を回避するため、稚苗段階から、こまめに薬剤散布を実施する

（２）稚苗～山行き苗（屋外）

・トレイ設置台（「７　トレイの設置方法」）の良否は、根鉢の発達とともに、最終的にコンテナ規格にも大きく関係するため、①同台の高さ　②同台の資材種類　③散水方法（散水施設の配置）等に注意する
・苗の葉色をチェックし、もし色が薄くなったら（脱色）、追肥を行う
・苗高が山行き苗サイズに達すると、施肥は控える
・稚苗の食害を防ぐため、常に見回るとともに、予防効果を高めるため、薬剤散布を定期的に行う
・コンテナ苗の葉（鱗片）がキャビティ地表面に落下していた場合、害虫による食害が疑われるので、薬剤防除等の対策を講じる
・コンテナ苗の葉の一部が褐変（枯死）している場合、速やかに取り除く
・雑草、蘚苔類は、見つけ次第、早めに取り除く
・トレイ台の下は、除草も含め、常にきれいな状態に保つ
・病害（赤枯病）を回避するため、稚苗段階から、複数の種類の薬剤を交互に使用するとともに、こまめな散布を心掛ける
・一回の散水は、キャビティ内の底（下部）まで水分が浸み込むよう、十分に時間をかけて行う
・薬剤散布後、散水は一定時間を空けてから行うようにする
・自動散水で補えない部分（散水がうまく届いていない箇所）は手散水を実施する
・散水後、コンテナ苗の濡れ具合等から、散水ムラ（濡れていない部分）があれば、トレイ単位、またはキャビティ単位で、手散水を行い、散水不足を補う

・トレイ内において、一定範囲に小さい苗が集中している場合、散水ムラ（散水量が少ない）が発生していることが予想されるので、散水チェックを行い、場合によっては改善を図る
・梅雨明け後の８月以降は、コンテナ苗自体が高温で乾燥しやすいため、毎日の散水を心掛ける
・トレイを設置する際、周囲に支障物がなく、太陽光がまんべんなく当たるように心掛ける
・コンテナ苗には、できるだけ太陽光を当てるようにし、徒長しない（形状比が低い）苗を養成する
・トレイ内の苗間には、常に風（通気）が通るよう、葉の混み具合に注意する
・トレイの位置を定期的に動かし、コンテナ側面に直射が当たらないように工夫する（根の発達を促す）
・トレイの四隅のいずれかにテープ等をしておくと、コンテナの移動履歴を常に目視で確認できる
・トレイ側面に直射が当たらないよう、反射シートを設置することも検討する
・10 月中旬までは、コンテナ苗の生育を期待できることから、それまでの間は施肥管理を徹底する
・スギ、ヒノキともに、下枝を枯らさないよう注意する
・夏場以降、キャビティから、コンテナ苗を抜き取り、根の回り状態を確認するとともに、培地の乾燥具合（散水可否）も併せてチェックする
・夏場以降、トレイを裏返し、各キャビティから根の先端が外に出ているか否かを確認する（各キャビティから根の先端が外に出ていることが望ましい）
・冬季も、定期的に散水を行い、乾燥による枯死を防ぐ
・コンテナ苗サイズを揃えるため、7 月末をメドに、苗の大きさ別に、キャビティから苗を抜き取り、トレイごと並びかえることも検討する
・樹種や、直接播種、移植等の育成方法が異なるコンテナ苗はできるだけ定置した列（固まり）ごとに管理し、灌水（散水）も調整できるようにしておく
・ローラーコンベア*等を利用すると、コンテナトレイの移動作業を省力化できる（図-19-５、-19-６）

（３）その他の機械・器具

図-19-１　コンテナ用播種・覆土器
（サンテクノ社製）

図-19-２　自動セル播種機

図-19-３　コンテナ植付用ディブル*

図-19-４　コンテナ植付用アースオーガ

図-19-５　ローラーコンベアの利用例１
（豆原山林樹苗農園）

図-19-６　ローラーコンベアの利用例２
（豆原山林樹苗農園）